續滕粟毛三編

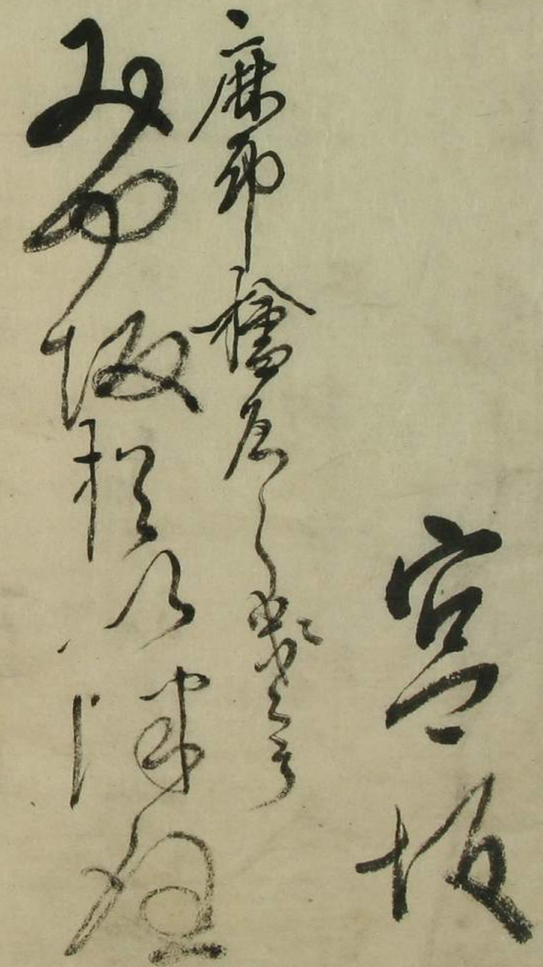
上

へ遠13
1164
28

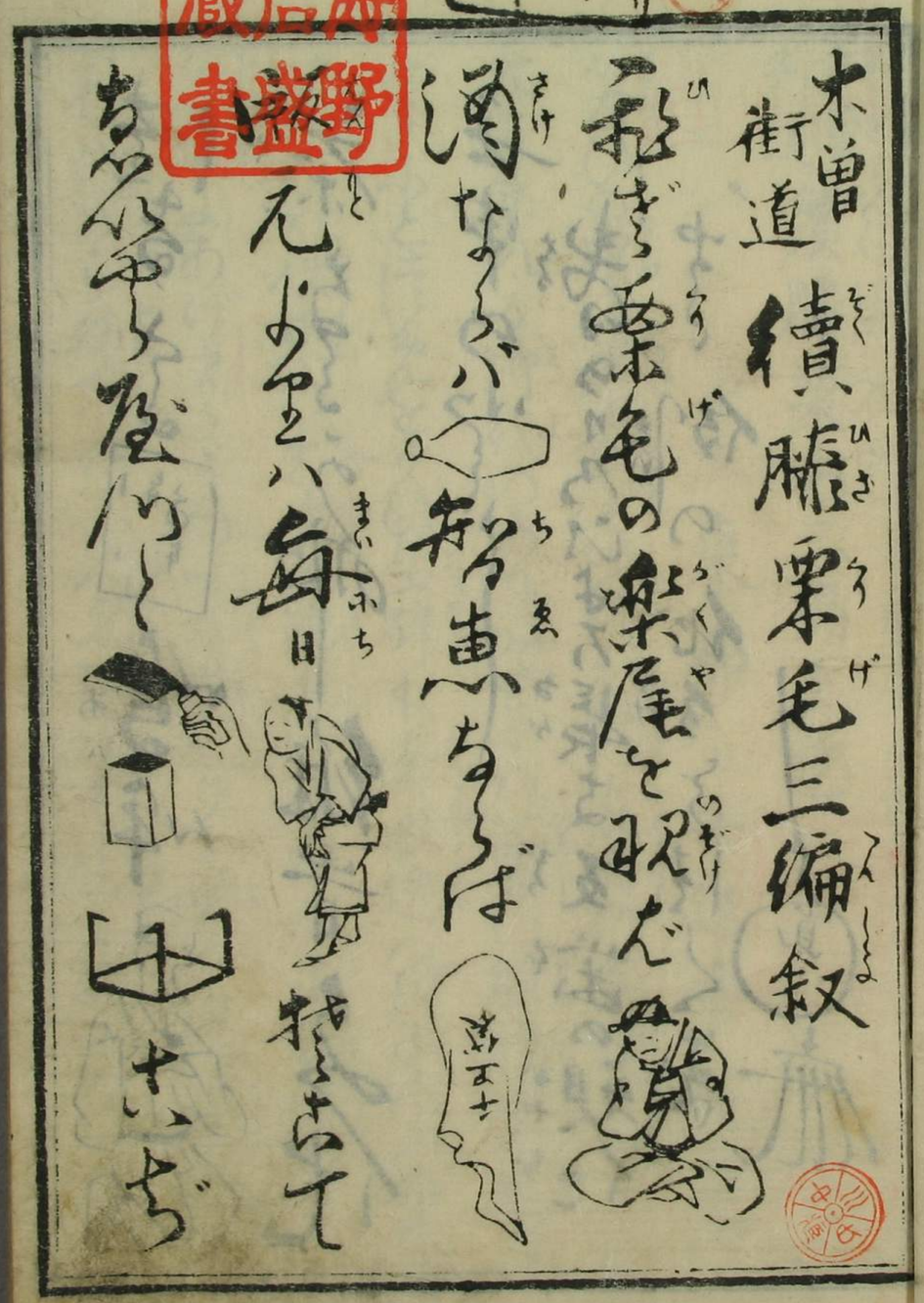
海野信盛蔵書

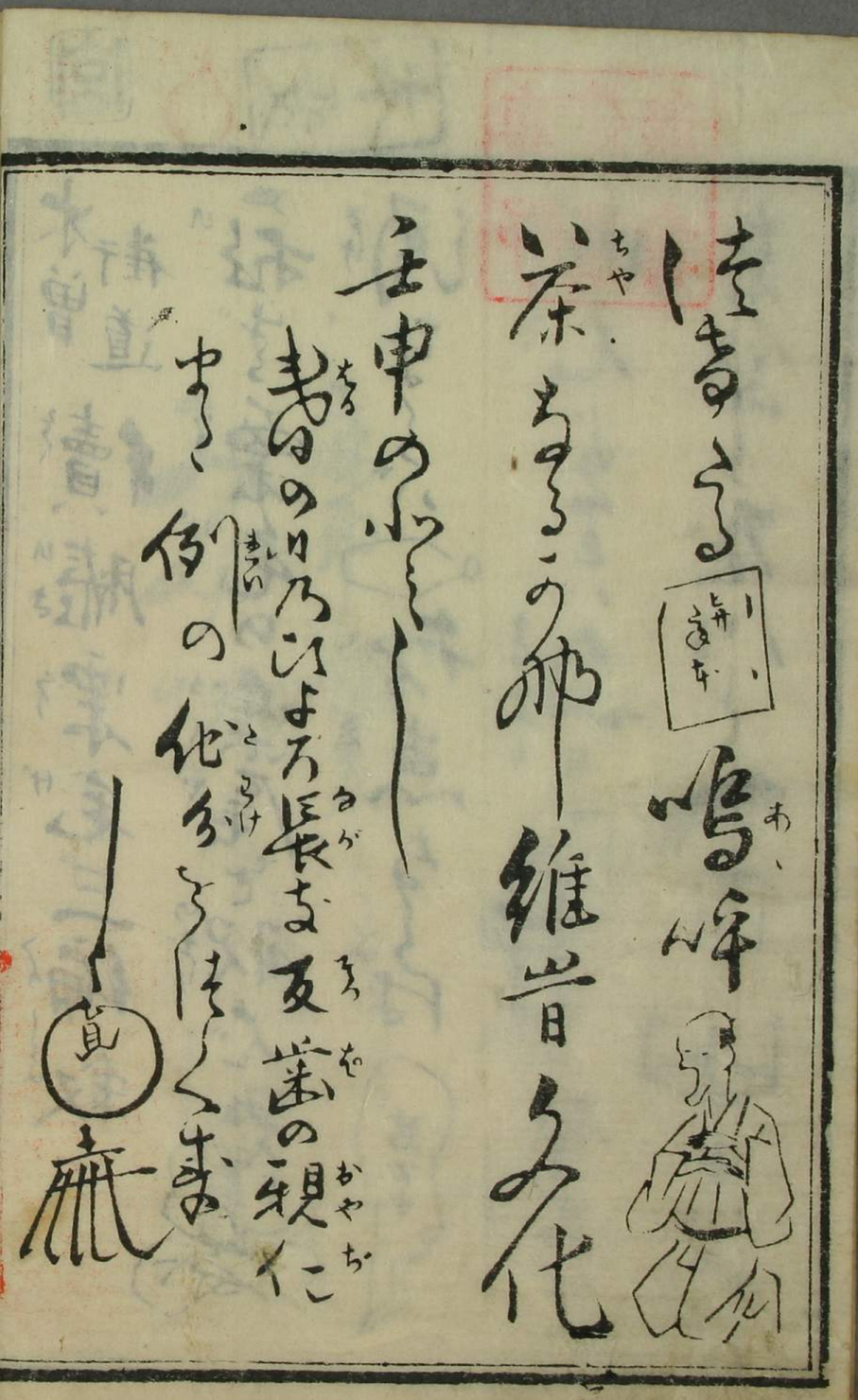
宮

特
へ13
1164
28



木曽街道續膝栗毛三編叙





本多侯御遺書

續膝栗毛三編上巻

東都　十返舎一九著

笑ひの中ふ双を研とひ。ぐつと昔のとぴやうしに
れさせられる御代のありがたさよ。一腰の脇指さへ抜ね
やうふと法名をとひ。生碑も本性逃の民。そろおねをを
せざれば徒末の乞食。銚のふあゝ糸きひもるく。
大道よあげやうんそ。ろる鼻うく世の中。千早振
神代ゝら結くつけ。人多四倍も。小豆腐ふかくて上れば

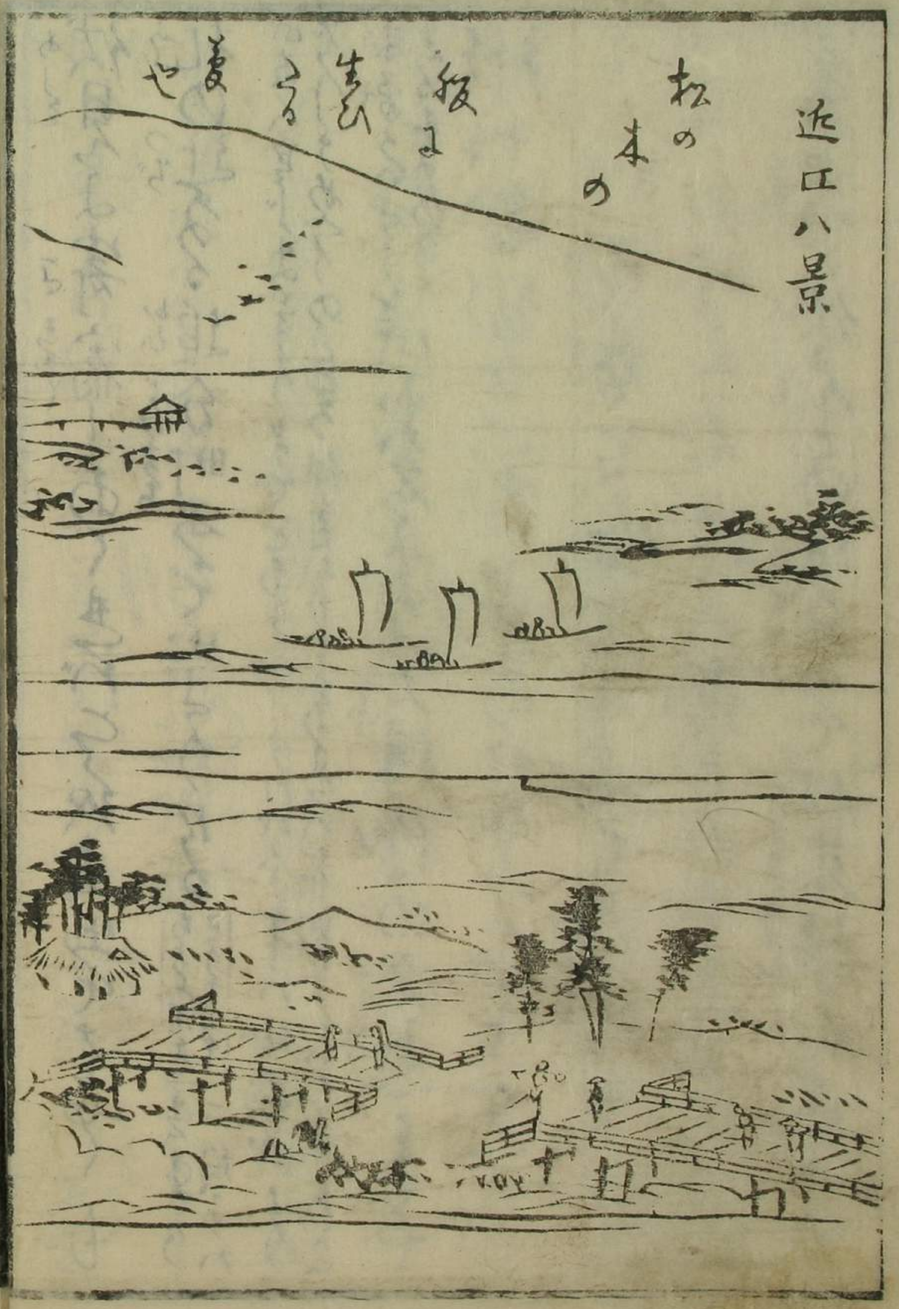
とそのエよ所積うけて。氏神ゆ紅の吉打あひ。
滝や湖水をつる山王の神輿さへ。血とんぞまれ撥撥
ゆく。熊坂が物見の松ゆ名のを殘す。居奈の赤玉
馬の元来ゆも姉茶ゆりと。屠うゆるとよで
考つける人のこゝ殺の出張よ。戈の山面しく。
朝やりゆる本曾街道をゑざ。今や東路ゆりを
ゆき。ゆくゆく京を離さて八ゆ。摂州路よりさぐて
尼が崎ゆら。神崎のロ兵さて。山寄街道を

伏見ゆよ寄宿。おくさびゆ紙立出てゆくゆも
札の辻ゆる追分町みぞ出さゆる
此女人宮ゆまうきをあらでいれば今年ハ仮初ゆ
なりゆうめぐりのところ俗者ゆりふとあまが報ゆてゆくさびゆ
ゆるゆるゆめゆりうを式ゆ名ゆよゆの大津絵の名ゆ。こゝゆや
計十乗盤ゆど。家どゆ
年勢をゆん世ゆよゆくべて商内ゆ
時ゆ大津の得ゆのゆるべ
ゑハ京と伏見との追分ゆて。往来張ゆ所ゆれど。

去東乃引手上年二編ゆハ

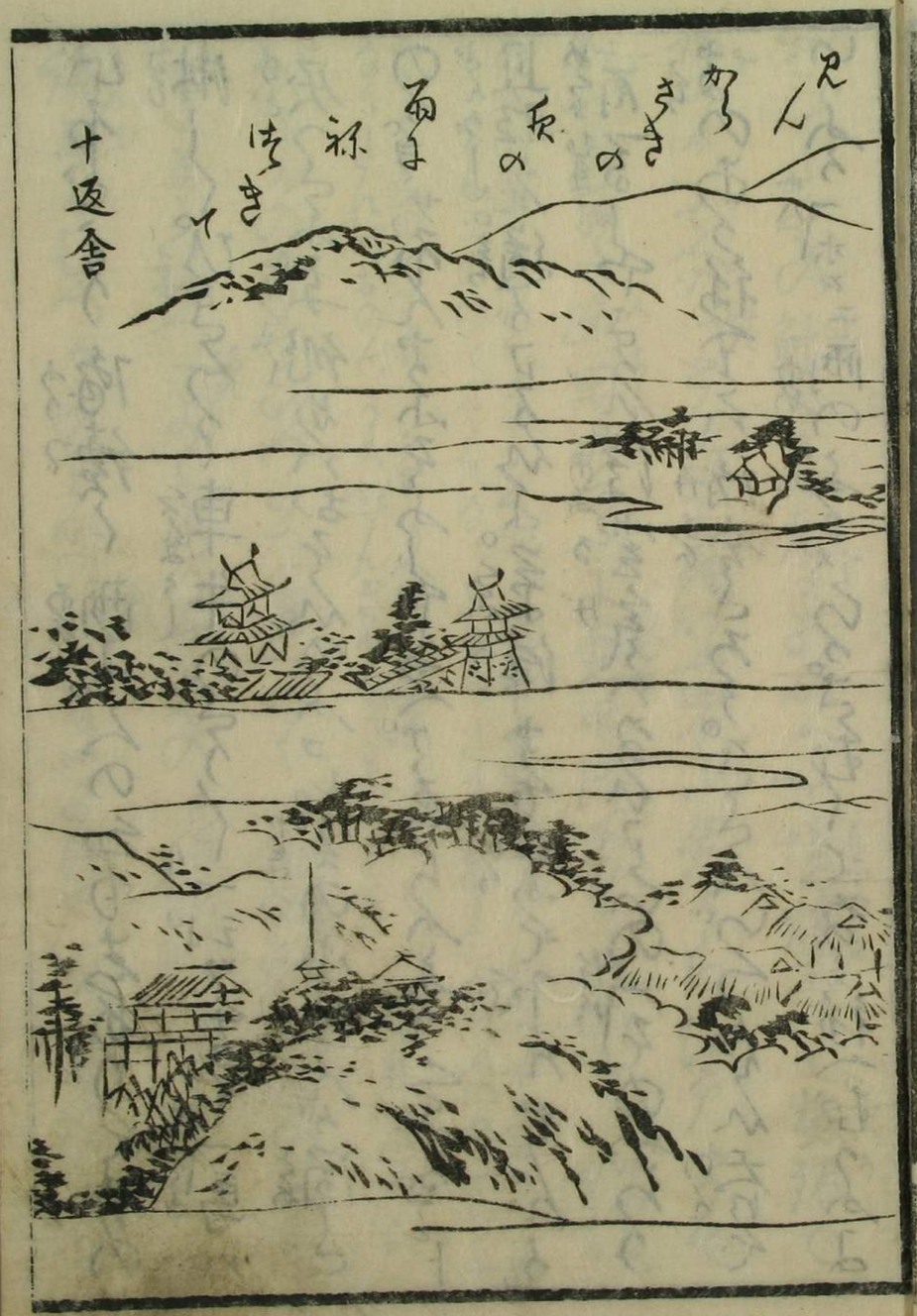
近江八景

松の
末の
秋の
月
堅田の
落雁



比叡の
雪
唐崎の
夜の
雨
石山の
秋月

十返舎



ひとりごとう 俗續く 兩よ。人の[illegible]あるそのの
淋しく ぴきろく車牛のろく 「ニッチョク」「馬か
戻つてふ乎 他めいおそんのコレ。冥の小さんが間さ
のつ。サ石んやふそのじやあ。ろらのあくさる。ナニト
且那元。縞ガコロんよ。第津さで乗てドんせんう。
育るじやさん。浮雲気いのひとの「そのかろう
なのあろ稼くこと清金ごろう。さとハぐつぐん春で
いろふろ「ホ」二兩のふるじやのつ。さむくてあろ稼へむうふよ

とりとその鮎ガこんえる。おのひろを焼ホて。焼弱で
あらうしてこの「そんごと」知いふ男ぐ。そろら江戸で
あてんあろ。用めつとよ。奥て性ある。ものろトいのつ。
ありあるるそどごろ。ろん出。用ものあくぐ。そろくさまぐの
さいろんこのひてぐ。文るくとろるこのまどあ。人のあろけよ
やろくくとあてんあくうちぐくのゆこ。ろさひくく「そ生でろら
ろりくくれガおのぐ。ろらげんきあろ。ようえて
おいろぐのまふとろつろこ生でくトあまざけ「ろのつ。ろ
おろまろく稼く「よくふろ。やへえろ。ト
編義ガむつくいろんの「あまざけハくろんいろら

まあまと八文ぢやうんの一いつたんうんるせん。ハ
ほめくとぞ。ぞんぞんづくのまふ。おそれるとおいふぞおいらァ
いやぢぞ。おめくひとりでゆくかしるせん。それはありがてえの
トあまさのちやうんさあそうの。ほよかくてのそるがら。コリヤあつくろうでうめく。
はよとろさんおめくの所へ小ぢんまりとぞのうくいつ
普請ぢぞおそとよめるおめくの所の子供衆ァイ
ヒーの孫どもぢやうんる。おめく息子とあがありまちろ
ことりぢや。孫ぢあるさうんむさともあるぢやあろぞんる
リリヤ所めがあわくて。おめく大体のエぢゃあるめく。
はとくくよくてしてぞよいくわど入ゆと一アイぢても。
三拾銭と四拾銭ずつてんぞ。喰ちせんうんる。そのの
ぢろう。この地代いくら出ゆと一アイ年貢ぢ一年よ
ぜ一百円ことぢ。一リリヤアスぢ。ぢろく句だろひろ祝一イヤ盃と
れ。ぞと二季ぢやうんる。そ其天ゆりとことのぢぞ。
急変その二季ゆ間遠ぢく。勅定ぢ出来ゆとそ
アイ出来ゆとも。金ぢいつ祝。万一帰ると

地ごそぐ兼知う紙一八ぞくるんの書とまるう紙く
と紙ちめくこの地ごぐやァあるあくぺたろさ八文ろ
甘酒で家内中の店ちろしまでさるとろまるん
ものぐザァいろふぐやァ紙くぐ書たぐこも呑
さくがざろたろちめろてぐ少ぐつろ紙くぐろさんろぺく
くんるのせく一アイさろうてもろんろいるドレくいく
たぐこぐさろ八ぐめくも呑紙くぐザァいさや せう
コレナ甘酒の殘ぐ書文呑ん見いる書文呑のの

ぐこの代ふさ引くくハァそろんるぐろんこざく
まるトこを注出て大洋のちを打ぎざるよ飛ろんく
とて八銭ひと目よろんるけいちるく。まるを云屋
ふハのぐ

風のぐよかれるるしる琵琶の湖
さろま八系の外の一義

かくて根所の城下を打るる時ぐ二三衆だくの
茶碗盤犬をけるけるぐらかけ出そもくひるろる。
仁のぐら紙不包こーめの紙そろおとるるぐからりしと

するおとたけ出べしぶ所布たりつれて捨ひ上り。跡
先をとんまつゝだちまちまつこりと笑ひて。扨ところ
拝だこんむ火八ちとと見つけて「扨やあんどく「い
めのをひろつ。コレそうとおのゝがかとこへ。日を食そ
探てんや火八ドレくヤア小判ごまく「ヨレトひろふく。ナヽト
天たさぬへようおど者がきいてゐるぞやア拝々。宝で
ふ自由ごろうとゝお接するさるものを。無足よ来るも
おきのまてごろら。さめくいろぞ。何ぞ是味ものぞ一盃

やろうの火八ソリヤ寿妙頂礼往来のさめやれ是の
ト曲くびをりく出そ深田の
長者まよひとる火八たから
かゝらねうらぺそれやせぞうろ
夜たがむりしみのきまのむくそを。
とうぞせし添のりとりひつるよ
其むうしぞ殊し紙今もそかみ山
蝦虹の足よ紙とるなし枕
えるうふ石山寺の観世音紙ふしおがみて
あふたくる佛の利生仰ぐなり
さてもおふその要いし山

立竹舍半九

浜田の町の友例よ。茶屋粥とるのぐで。味ろろ。
女の衆〳〵あるさこ五〳〵おそいろな。おそくるのさん
うのる。名物の坂汁よ。麺のけけ如れ鮮のおさ〳〵身の
ござりまんぺ。おもそそるく〳〵サア坂さん今のと言で
奏ろ移へろ〳〵うるれとおもんもう。アイ此そんるのセ〳〵ト
ちゃ面ごるる。コろんおひろろ〳〵でござりまを。此酒のと
ちゃ屋の女
あがりるさそんるる〳〵さけも喰ふ〳〵飯も喰やセう。
るんでもうるだをおろろけ出るのセ〳〵そ〳〵外まま

何のある〳〵おぐを汁よ。の絡ことうき菓のおひと。
宇治茶の煮メも、ござりまを次〳〵るんでもいろら。
酒をそるく出〳〵そんるセ〳〵ト此ちち女そうさうるオ
てゝ〳〵さうぐきをめちりのづる
ドレイでおもう。さけのるろ〳〵酒ぐぐ。この坂〳〵
ござ〳〵れおろんろく〳〵ろんぐぐぐぐ。あく貝ぐぐ。
かぐろてるるぐやァ移へろ〳〵ホンニそふ。ろけ。はるの小八
さそそのろ〳〵コレあのさんはめでくんなぞろ〳〵たぐの
敬でるけまぐのあん基の虫ときそのる。ノウ あ移

さんイヤこうせいの為こまこと屠ざる薩町形道乃
外科医者よんせこら。おーめうで膏薬が出ふこれ
とぞでと云いふぞろうふ〳〵へこまいろ紙ぐ。きせ形を
ワこれて来やァ来あくーぞ。ぬつてきつこまやまを
いのゼト此内いろくさるものいでめーゆうの番〳〵サァこまで
さくくさくこらよとうらんぐまちひ
ちつとだろう人間のやうな心ちふるつこ〳〵いら。
此亭こうさんもせとるのぐら。お見紙元智て動宣
まてくらんるのせへトぐんのひろーうをつんぶまてさいぐ
ちーゆたくうくてうけとうひくき

ふそ〳〵アるのんどや。浜田村雀屋太兵衛悴太五。
ヨーがとこのちつさあが迷子れどやふ〳〵ありがとう
ぐざりまうとざれるどこ供よりひつけまして。指示
の町の諸屋こらぞとうてうがけよぐイおとこと
ナまーこぶおるのこぐこがお拾ひるのこれてやこれ
こんこらの仕人合ぞおここどけるのぐざりまうこと
おせうふのこぐのそうこぶ〳〵十ニそれ〳〵迷子れぞドレんせ
このよぶけトきもをつぶ
るのせへトはふとうてこるふ〳〵ヤアこうへこんごこと
ちがひまう

「ぞんぶろく」稼ぎ者ら
あんせる小ハぶろ〜〜ら
そ〜〜〜いのぶよ〜中をあ〜〜あてゐ
いふ「いあくまんぷてい〜〜さんさいいくら
だ稼「ぞい」六百七十文でぶりまと「ぞ」ぞまてぶ
稼くトぶっくぶをいひぶんぢゃ〜〜て
てをさちいぶるふぞさちもく〜〜く
拾ひのせ〜〜ろりとてむぶる「ぶ」
さてて〜いよ〜〜ふまろひ子のれ

かくて両いよく「ぶ」ぢろて。桐油とそわし。
宵ヤでもこさるだろうふ。方云も晒「ぶ」も生ば
こそぶう〜〜く弟「ぞ」の姥が「ぢゃ」ふぞいろけ新
「ぢゃ」おさいりるされ。忘れのうぶりちあぶらん
ろる「ぶ」いあくまいぴ「あ」いつあぶるまら「ぶ」の
「根」「ヒヨロロ」ーのふ〜うちいふりまにぷうふぶん生よ
ぶの〜〜ら止まちよんぷあるさぶぶどうちゃへ
もぶ〜るさるまらちんが。「ぶ」ぢ中の両て曲川へ

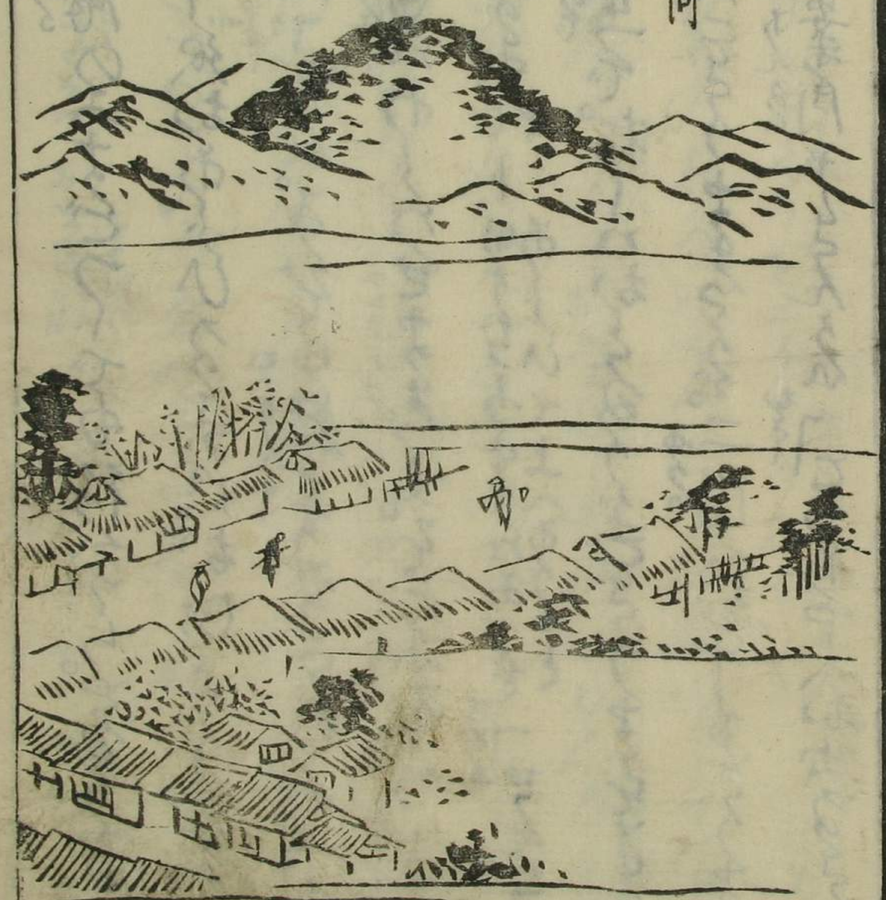
大ゐ。中山屋なら宇山孝の砂川由安村も。
先刻とまうしまさうん。常宿へおとまりなさう
ませ。ヤア川がとまうさとゾリヤアそんざでん
くるこせさて方ハ駕や六〳〵ゑとやまた。
とふぞお宿をお願ひやまと。こちらア宮宿
がありまた。さようでもござりまたがそちやへ
お出なされても。川越でおさて食がござりまと
さうこさこうゑ隨分寄麗でおそこも安い

まゑよ。何どやあうとあるとおそなされて宿を
御願ござうへ。お来よ入ますこらお願ひやまと
あゝそゝいふなら。マアそうらのとふまやせう
ト宿引をさるたくもくのまちもくを
ありがとうとゝいふらくのまいうて
さるまでござりまとヒザアおそらうあさうやせ
ナニト仰たさん。第蓑背ハどうてたざぶおさまら
移人内ざの。イヤあるこ方ハおりくさうさるべこと
ふさうづまさ。さようならどんぶんおさまりやた。

けさてうろハ五十ヤ百のお寺へいてゝ中ほどをうろん
ゆイヤおあくそをいろてもナァほほさんからうろ出入ハ
生来行くぜつハテハからうるとそをうろんせうろると
玄冥うろうるとハ彼方ハ寺ふ生遠入ハ生来方に
うろうるト内ちぶくのもみとさのさふうの女モミたそのを
ハ思案ろるさうぶとこうくおとをうでるんういる
トひをぐうをれて隙ろちんぐをもうけをどさを
うるうあるるさからちをとあるうれトまさゆハうをを
をうて川をを

草津

一河



「いろさん仏様のようなごつでも移りくらっとるうやな
「女」サアあんみあ〜沢もあるふひるされ。おひらうがろる
ござりまたさろんっざでも雑巾るされさじや
あろっ。お御膳あいあ〜わせまちよっそそふろうっとら
かしておいきるされト附あ〜ひて上へあげると「せんて
お宿別ぶお出でぞ〜いおとるうぶござりまちさろん。
「ど」窮屈ろふござりまちうぶ。二階へおとーあさろませ。
コリヤ〜おさんぴ案内やきさんろん「こちらやへお出るされ

ト十二三才ばかりの小女がなどとぼん「ぼ」おちあ
うとはよまげてあろうを二人くつれもく「ぼ」おちあ
むちめ。アノいろのおろういうろうん女中さてのの
かいさるうるんぶ「仁」エおるどーもおやとるる「ぼ」それふ
おちてんさまひぶのるんでもてのやどろくめぶ。ろって
おあるのであろっ。ノウおむちて「ヨホ〜〜」とてやおろ
ちせ取ろんみ「休」るんふ〜ぶ。あいろたぐいおろまる
おろりのぶ「ば」おのつるんぶちさんでめうけさいト
けうちりようろ「さぞ」お茶「ぶれ」でござりまちよっ。お「風呂」も
ろうもさろうて

遅ばせながらごぜうまを昭月へぢうもらおあんさまで
ごぜうまをよ。まつ〜川かとの外の大あぐ
ごぜうまをさうん昭後日あるくでハあるまい。
さんとお昭月ハ矢芝の鶴濱八幡ぱ参れで。
ちとこーハいづまを世話やくよまつりまをさうい。
お日和あるらハ糸清るされお供いこーまをよ
ちらるこそれハどのぞ糸くやせうあるくー
おめーなさまトちうそくもりてあくーゆきしのこモレおめうくハ
ありてあるふれうい

ごぜうまをせんうのるアイお邪ケあぐらさを
焚てくんるせへアイかとまりまをさトふろの下をされつけるー
コリヤありがてへまをーおめへのやうるうくーい
へふぷスーてやらうて入さらぷくうぶようとろ
てうへはんまをぐるどろうヲホくおやらくくさの
あつまるるんるアイヤおやらくくで神へぷんさの
るのさぷ今青こふどまをうさも代生の縁とやら。
おめへどのそーてくまるる家へ神へうトいちやつさ
ぐるうち

ゑつものの　おつめやくさんもう　まさんセト　うびたそれてばかの
方をきりめふうけてたうり　ロく　ぼたぼた　まさの　ロ　ロア　小八
びとじめとうらぐしーそ　ぼうあり　ニうめのどうて
ん入ふ　ねくう　今　ものふ　ふいうて　笑てねさ　おめく
ねぐろ　かの女めといちやはりてねる　どんでも
この亭主めぐ　はまんでけうるやうぐ　業たるな
そんさ　今　小ちんめが　まさらきいさら　とてあ
女房がるれそうぐろ　なんでもきめ　めを
おとるつてねるふ　遠ひれ　ねくと　まさはく　白眼で

おめさ　はうちあつておうつし　今ふおいうが　やでお
めふ　鼻をあうせてうんせやうくら　マア　湯　ふ入くく
まさうート　ハ門まさハ　ものふ　ひ　ねる　出そ　ま　ま　けれが
ほうとハ　ほうとハ　へ　ものふ　ものく　とだいの女さ　ようて
とこを　コウ　女中　ナルト　おめく　ふたるものが　ある　が　後ふ
そうと　まてく　ま　ねくく　ヲホ　ホ　おありがとふ　ごうう
ようて　イヤ　じあうぐん　ねくぐ　ぐんさうう
ロ　ロ　この　ロ　ロ　旦　ねさんが　ものまさ　そ　そ　るんな
るんぐけんるる　ハテ　それでようあさ　おめく　ねさと

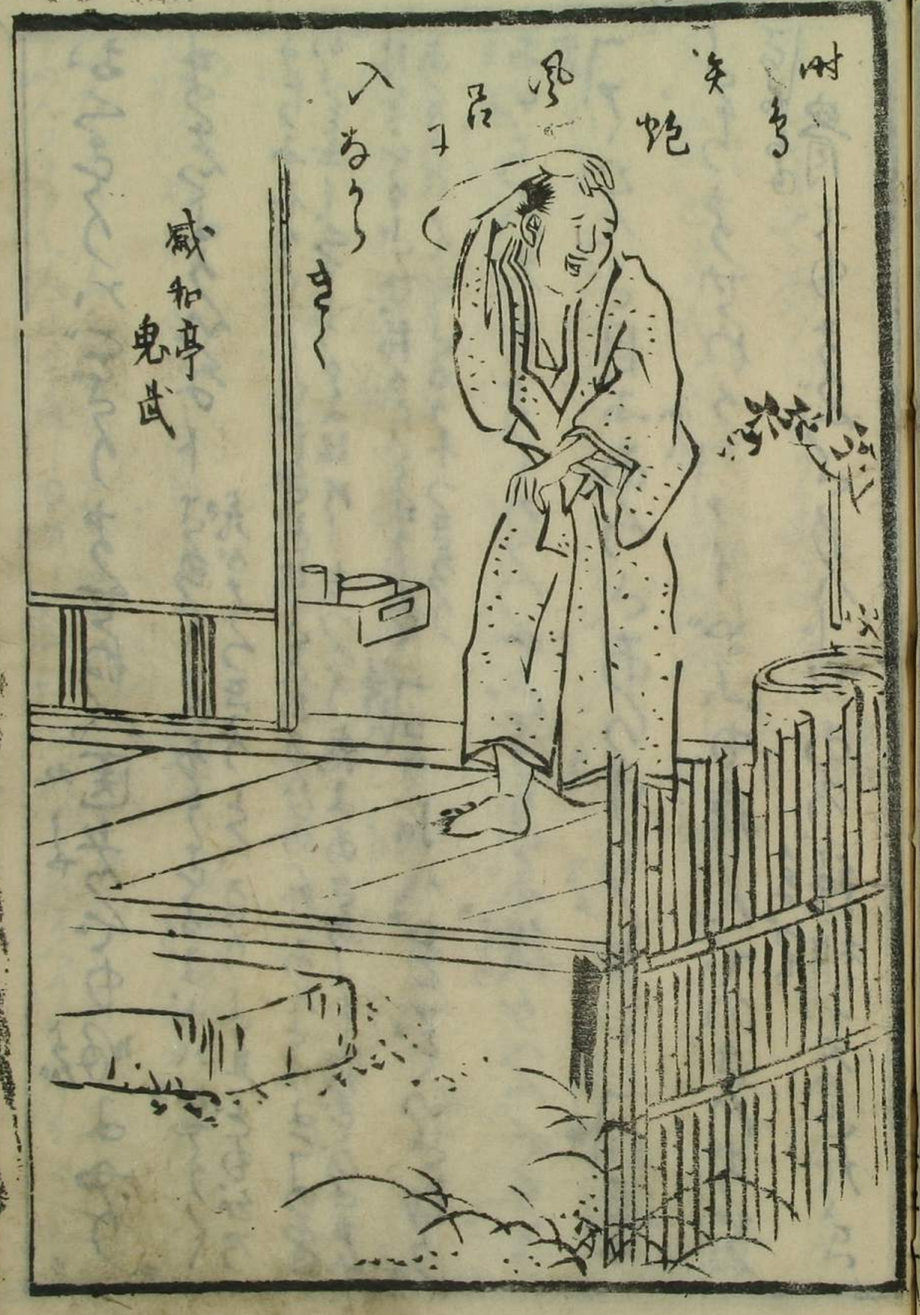
見るすぶる。コノ畜生めト思られつめると女さま小ハコウ
旦那がやうまくいいてゞある。おゝさへ矣乾ろ
ハやんとあらく旦那がおいゝをつまていふといふ
うらそとでワうちが飛病をおこしてぼまの男
だろう。旦那と一所よあつてもまつてぴうう跡ふ
殘めうら。その時そうとうとうる食へ出来めくう狐
ヲ、おうやの小ハイ十サコトひどゞやア狐ハ嵐知うく
アレサマアおそるーるさんぐいうくト併ものくく

あぐりこをコリヤくおつめ。俗をしてわるおとこのぐさぶ
あうちやへいんうくいい。鼠ハあるのこのかお休ぶ昨日ハ
どハやら日車りそふでござりやうとハやんへお依
いうてやのえよ小ハイ侍旦の男が。旦非系りたぐつて
ねまそうら一さよるのらマアおやうとお休トいひそ
くうそくありそのくく係ぶ併門てうづうりのどうて。そのまく
行ものしるがねのうりをしてくうをさるぶいうの及
くうう出る必業あるゞおりひつきあそあるものハやんさんけうる。
ているとこさくハだうりをやつつり。俗でもさくひやうをおこして。
あとよのこうんとありひづけてうちあくるが面の日のこび
つれあやふうりとあひくさくるが新ありさいぐ

それどふぼりつもござとられまえつめぼつゝがしてたゞがゐらのと。
くびはいあさめしとくらつてゐらぬぞ づくり寝の下でらへきたるふ
小八それとんだことつくぞふびんをなし由みつまさらせぞその方
ぞくりあとまのとるさんぞんぞふぞして きくふ人の目かさん
やうなみ、はづらひを知らしいめのごとさまがくよくおびさんと
おりひつぎぞなんでも二つゐのおしどうら。はござとおちてけがをせし
そのまめでるし おとまのそしんとてみぞては おふ おりしるろ。
縫だしどのふとつめうら。はござとふさたづしてまづけおちさうしが。
あんとふ二十のあさりを まてゆらそこらえられを 小八「あのさく／＼ 「ヤア／＼
どふるさん。ヒコリヤ とまぞそかてこいまん。たまう
女「ハイ／＼ お針へふとりけまえよるのみブウブ
プウブ／＼「ヤイ／＼ おまが針へふくのじや ろのれまん。

まくみだらけ不志おつまさまへぞふじやのみ
トおり由二つ久りけあがりて見れバはぎはぎも たちがけたしてふとんまかされるなるてゐる 「イヤあなた
どふぞなされましたろ。今おつまさまが階子から
おちなされて大怪我でござりますと 「ナニ怪我
でも志やしたか ト おどろきながらぞんで出られもせんぶて。ちぞうせうをそかるかふをしてゐるうち。
男どもがあつまりしてぎてハをとられのござ。 ちうくと二かんつれてあがると 「なにわとてきまつさ
めのじや。おおつさまがおふくろながら。此体じやな。
まさくしも此のえハやまんさまふぞで一ろいぷのんぞ

ひゝ
拝ハ
耳と
ぬ


蛇
入る
感和亭鬼武

おこさるハどざるまうせぬ。医者でも呼よう
まうしようかト　さるぐつわをはめるよ。小ハハやうく
気がそろつとんろうとんろうとしてどもおろ
うちふだらくしくしどざとせーとおりひの外おんとうまてのを
りこを出しーどうーづなよ休ばーもつてう痛よあさあーもくなどびさるん
目ををるぶけ。移ろうまーまーど　強
あきれたそるうれつをまうり　コウ小ハどこでいさもう。
おいらハ大分よくなつてゐるそこでうぶ後ゲへうてさ
小ハ
アとんど目ふあつさ。あいうしし　お腰が
こちませぬろ小ハアイどよも痛んでのさんまうぬ
ほもあ
背ども　まどうさもんじゃあろ。強腰でなとたさ

るをとてあげまうまようんイヤそ立てうりか
左衽をとんで。療治紙して苦ふがいて小ハ人の
幼もあるどよ。薬だういいろどとあぞ医者
どの紙ようんでらんるせ人　さよあるさいとね
近ふよ骨継があるさろんト医者をとひる　エい
はうまうう移人目ふあるさ小ハあめ人ろう。おいらハ
痛んめ紙をるどけうまう移人　トたびひよもひのりく
さんちびしことを
いろどうこちどをのちちみんふいらしのちちどこ
ぜんろう。人よるーもまう後仕合あきれうてゐるうち。

下ようそうぐんのゆしゃさまびんろうどのゆのとま「医者」おやあさぢ
おやぢさをりをさるぶあろうべとくさうり
ハどろのさじゆんを「小」ハイコ
うちおちるさんさそうじゆが。先ん御紙んまちよ。
ハアはいはいつうんぞくまおんせるさんばうんよ。時
るるとと。療治がいろうて面倒でござるうんの「小」イヤ
時とぞさのでハこざりゆはぬ。たうさ今おちうさのぞ
ござりゆと「医」ハテそのおちぬさんたくおんせるさんば
よんゆる「陰」さあうくぺ「医」合体は男が素ぐさろぬうの

ここでござりゆとぷちるうのうちそこ蔵金をあろ
三ッ目。かさ行て尋て苦ろうてぞその上へおちると。怪我い
のうゆとめくよ「小」イヤおまてうぷぞの内がうろん。
どどのくふうう。二階く階子段をおくとうあとが
あるものく「医」必竟腰をうされたまびとそ。り
肩の骨でも打おそうんなされ。たちまち命がないよ。
死ざりの療治をうち命がないよ。
とうふものじや。おうゆ骨を而笑ふかさぢ仕合
とうふものじや。おうゆ骨のおまてのじやさん

骨継の療治いとさざんあるそうん「骨のおれさ
のへぶ方を継合せそ答へ入まて。焼ささつげ
やせうう「医」そまへ焼継のようでござる。漆戸抱と
人間とへちがひまと「ア」人の骨のなてさのも
つげおろう稼「医」つげるとも「ア」不ん心ろう。
合ちがいろ稼へ「医」ハテちろん浅接へ。継本をさると
おるすこと。柿の木の葉。梅でも樹でも切口を
合せてまつうと者つうと自然とつける

道理でござる「ハ」継本をさるあへ。寸時候が
あつて出来るもの。人の性質へいろるんどき
まろうふう者是稼へものがろう。そのアとりあへ
まつうもをめ「医」そとがアとうちがでござるうんの
「ハ」イヤ「ア」どふも呑込ませぬ「医」ハテそとのとまる
素人でなのも者ぬくせまちとざんな「ア」ナ
ちとざんとへるのんのとぶ。此義医者めが
「医」薮医とへ古長なるいろう出ろめふへ

大福屋

ゆつぷようとつはらァさるれいがあるぞトうぞまうちそさう
かれべ医者さまをつがーてそうしたらしたへあげあくを「アイそ
ぼうさまおつくけめくんとさるこぶハうそぞめらうとうそ
こがようぐつてまつさぐあんのべさを祈へゴウ
ほんさんぞうさのものざ扶角医者が来るぶ。
おあくいらざるこ祈いつそぞんうくそまうこ
うらつまう祈へトけんうもをくるあつまうんぶ。
医者どめんるてうつて道をかうぐさんるぶね
今来ぬる法京がんそかうそぞまハお見ぶ加持

あそるるとうてゆうといのてぐさうまさぐぞるれよ
るうさんまうさぐぞんるこぶゆうぞそまハおるゆをかや
せう「さよるら呉今トかうそあうーまうぐるよ「見へ
「ぐ青ぐ方ぐぐうまうぐ「ぐんるふ腰がうくのあうく
かぐんぐのさまうせねぐふあぞこのかぐじのまうさふ
るるあうよ「ぐ祈禱をあうるのをかうくすうぐ。
その腰のかぐんしの祈祭祈アるをーもんぜうまよ
トあうーれつまうう、うるも出ーそひうみ、「そもーー山伏と
ぐさんをかーらまいぐぐれまゆーしあるまうそ

すまれ山に稀なる然きるもなきに山みてしぜひもなくんハ
布切七八寸ばかりに縫ひ合せてかしらにか
いたゞく頭巾の地口に依てぜんなり。又は珠数ハ
いらたかでハなくて不動さまにてもあるべくぞうら
買たるにハあらず其の古着屋にありしかども
寺の山伏がひとり行ひのるめのなどらがなのどろ
奇特のあるべきぞばなしがなく「小八 コリヤきあきた
かんさ楼がぶんくとのびてくるやうに「法螺 ホヽヽ 二

も 宮ちりとで喜直に是なるぞ。ソレくめたまとしご
「法螺 ぶろぶんく 「法螺 そそそぶく 「小八 エてく
情なのん。おんありいのりぶきてきそそでじろのなさへ
及て東さ「かや コリヤなのなどいのりきそさのや「法螺下 エてく
己の行力ハきてきそるる。ちりふべけ夜ハうじろの
あらうら行を返して世りまよ。ぶろぶんく
「法螺 そそそぶく「小八 アヽ コレく。又いのりきそて茶の為へ
かゞんぶ「法螺 そそんなら又まへのあららぶろぶんく。

「ソレ」ゆんさんこうパイヤまさじろくゑかんつさ。
「ハ」エさこのムぶあんぺるぜんをてうさんぢうるさてる
「法下」イヤいるのぢやぺいのるもさまぢんお猿の米春
とこんるゆうよ。菊のわうこんかんざうぴうくそらし
うう。どんさてるのぢ喜さひめが「法下」ナニゆんれさとんぷ
ゆふ行襦ハまてゆらぬ。猪もふぜんト きらゆまざるこ
こぢんぷのひあぐら二うんをありると「コリヤイ。どふさるく
小ハちうくそうさるうよばうちう
「法下」ぐくこのうハあるりしものうくぺれやぢまさくぐ。

ちんぷーさトゆうけるうネをしてゆる「モこく只今
ところく好うけあげうて
川があるすてぷ状名ゆ彩がとをうまさート ちうせ
ゆるくこんんさのりこあうよあるんゆうびませぶんでゆうふ
ゆるとしてゆうくくのうよとしゆいうこゆるをうゆうるのぢうま
ゆうりけれバゆがていそぎまうこうこ
この日ゆとこうりぢうんそのゆの九ちゆさる

うさ蒸の亀つくうー犯云よ
どうとおちくる彩ぢーどうら
かく打奥ぢて安村川よいうんぷ「ぢるゆ水ふん
舟ゆうてゆるゆ蒸ぢ。ぢんうちうとうて鏡山の

走場を打ちそだ。砂川ちくあり けきべ
むりふよ又川がえんくるが。搗も稼人おかり銭と
えんくさ。それあしてえ川銭が居ねんのさいいんりハ
たてまら稼人 一アレくく川下と人がこちこうこおる。
おいらもあそこえ銭そふじやア稼人ら 一そふさ
きろんとてア稼人ぷらうーやせうト川上へ出てえれば
男きりのを弟あそぶくよりはておこうまのうへはきしあげ
ろうもあれーしぶ中ひどくもくしと鼠のあうりてあるひとり
鼠でうりかーして 一ナアコうきうーしアあのとをうじ

うらぷんでうふるうらざアるのるめんぢとあやうり
このそろ汁ざ少らうるまくうぶ稼人何のもを「各」の
こう稼ぶ。裸よるうそさーやせうト少人そのまく弟を
ときさたぐうろ
るれが歩行弟もそのとをうりくくあのたこ
あうきの上へさーあげ川へたりうて川上のうとをうんまうぶ犬
ぜいのものの川でのうさうまあそこーもくゆうさと。さてこてえ犬
あそ川のこーがいうもとちがひうふやとおんどそのでいるくて
ほたうう少人ひとうとてもくりのを「コトヤとんぶ
川下へさぐうるるう川上へのこふくもるをとんもの
るうぶ。ぷうちが往来の銭場とんくるが。肩車で
こをうらあぞんるふしふくい稼人とんくるぶよて

足を召遠てゆき。ゆ、よにてうかうてものご。サア
あんくトのぶてゆ、ぐんぐと川中へ引るかるゆさの三川か
ゆるゆ 小八 コリヤどのぶ。さ行く引ところ男ぺでとてらく
るとゆ。首ごけであくぶア、さもゆくとゆ。紙くト此内川上を
引るものども 小八 ワアイく狐ゆでも汚まきとてらく。
あゆうよく 小八 エ。何をぬるきやアゆ。ゆるぬやゆ
トかゆくゆぶら。ゆんゆ川をゆるくてゆるところひざゆト
よでゆうやくぬまてゆさもゆさんゆ。ゆるくとゆるひ出し。
さゆものをきるゆぶら。さ行くとしくゆるゆの紙ゆんれば 小八
ゆよト弦をたきてゆたひづゆ。ゆくぬゆゆうゆ

ゆんさゆし。さ行くとてうせゆるさゆ。首ごけ
ゆきゆるさも道理。ゆのとをり居までゆるくゆん
小八 ホヒこのゆ。そゆとんきるゆぞ。ゆんゆが陸ゆる。
ゆくくとゆんご目よゆうせゆるくゆ〳〵
ゆぶきとゆる居ゆざうとゆでゆとゆ川
ゆまよゆきゆゆぬゆのんゆらゆる